

私のまちにも ふるさとが



明峰寺

三隅最古の天台宗能禅寺を百余年後、大寧寺十世奇伯端禪師が開山となり、天文十一年（一五四二）毛利藩の臣堅田（壱万石領有）が実父明峰昌悟居士（粟屋備前守元通）の菩提を弔い、二十石の知行をつけ明峰寺とした。寺の下僕鮫屋三左衛門が開山禪師について長崎に行き煉鉛の秘伝を受け明峰寺鉛と名付けた。長門の三名物（下関亀の甲煎餅、厚狭寝太郎餅）と唱されたが、戦後は製作されていない（最盛時十五軒の店があったという）庭は微笑庭といひ画聖雪舟の弟子の築庭したものである。

昔天台宗で能禅寺だったが百五十年後、天文十一年（一五四二）長門大寧寺十代奇伯端ほう禪師が荒れていた寺を現在地に移し、曹洞宗とし、第一代となり大内氏の霊牌所とした。

慶長年間（一五九六）毛利氏の臣堅田公実が、給領主となり一万石を祿したので、二十石（五十俵）を寄進して、実父明峰昌悟大居士（粟屋備前守元通）の菩提を弔い（実父の戒名をとって、明峰寺と改めた。当時三隅には他に寺院と称するものはなかったという。

其後、堅田氏は徳山湯野温泉に所替えとなつたので、二十石の知行は召し上げられたが、慶長二十年（一六一五）田畑六石二斗壹升と境内山林を賜わった。境界は山頂を以ってし前は之阿川迄となし左右は両方の谷を境とした。

寛永二年（一六二五）野火に逢い一切焼失してつた。毛利藩命により益田筆頭家老が乗りこんで来て、大工左官木びき等が動員され数ヶ月で再建した。そして人夫五九五人役、材木、萱、縄、竹、米華は無料で寄附された。その訳は藩主毛利秀就（元就より四代目秋の初代）が国入りし各地を巡察中で、その時寺を旅宿舎とするのに必要だったからである。

明和八年（一七七二）に又野火で焼失したが、此時は老年がかりで自力再建して現在に致っている。庫裏（住宅）の方は大正十二年（一九一三）に新築された。

本尊は十一面観世音で仏工 春日の作 三阿七観音の第二番有名である。

開山奇伯禪師は当時の文明国明に渡りたかったので長崎に行った

が、志を達することが出来ず、八十歳の時明峰寺に入った。長崎滞在中寺僕（寺男）鮫屋三左衛門に鉛を習わせて、滋養剤として喫食していたが、五年後に死去されたので、三左衛門は天文十六年（一五四七）独立して鉛売りを業とした。延享年間（一七四四）以来毛利氏に献上を続け、最盛時はこれらわけて、十四軒の鉛屋があったという。長門の三名物（下関亀の公煎餅、厚狭寝太郎餅、三隅町峰寺鉛）といわれていたが、戦時中材料で行詰り廃業された。大変残念である。

本堂の裏の庭園は「微笑庭」といわれ、雪舟の弟子の築庭したものとて価値があり、特に「心池」を中心に枯草石、砂顔石、正法松、無相滝、微妙橋等十勝があり、この庭を眺め乍ら、寺自慢の「精進

料理」はおつなもので、大阪始め郡内各地から、車で来る人がふえて来た。

又、最近「ランプ寺」の愛称で親しまれており、五五〇個の海陸各種のランプは、先人が使用していた貴重な日本の文化遺産と言える。

親しい友と静かに酒を呑み乍ら語るには、古い風格のある洋灯台のランプを囲むのが一番であり、そしてそのランプの製作された時代背景、目的の具現、改造されていった美への創造、ランプの光の下での一家団らんの様相……。

何としてもほほえましい、古刹に親しみ生活即禅を体得することも楽しさ格別である。

文芸

清風句会

十二月例会

（順不同）

- 富貴寺の国東塔や石葺の花
初霜や渡り初めなる丸木橋
滝口 旬一
- 柿の実の熟すまゝなり無住寺
鶏頭の永き命に水雨降る
山中 重代
- 立冬と思へぬ今日の晴日和
初霜を写して湯立つ朝の川
竹内 奈美
- 日田杉のみがき柱や冬の里
湯の街に入りしか香る冬の旅
岩本さつき
- 初霜のありし寺路の庭を掃く
帯目に紅葉許して微笑庭
齊藤 元
- 忍老寺思はぬ所に冬の顔
紅葉湧き奇岩渦巻く那谷の寺
上田 雪子
- ごま塩となりしひげ刺る今朝の冬
初霜や老の部屋にも模様替へ
宮永ミネ子
- 初霜のおりるけはいや寝床冷ゆる
ごみ燃やす煙の匂い冬立ちぬ
三好 ひで
- 初霜や雀ら会話はじまりぬ
霜の声骨の節ふし堪へけり
笹見 梅雪
- 不具の身や嬉しき今日も冬日見る
初霜や刈田藁すば地になごむ
山野たけ子
- 供華の香や香煙たゆとうお取越
白壁の土蔵の影や実千両
山崎 ヤエ
- ペンを持つ指先に老の冬来る
仏祖堂香焚き庭で銀香掃く
池田 久子
- 湖底なる古里の秋涙の碑
紅葉映ゆ山ひだ深く九頭竜湖
宮垣 萬子
- 顔振じて喰ぶる蠣や柿の秋
河豚提燈茶の間の隅に位置をしめ
大深 八重
- 立冬や軒のすずめもよりそいて
初霜や庭のしき石白く染む
仁保 民子
- 初霜やふれて鳴り合う牛乳の瓶
初霜や古き頭巾の石仏
岡 松月
- 外国へ夫を發たせて子と師走
アラビヤの父へと書かす子の年賀
因藤 兔史
- 選者追吟
ご隠居に和服が似合ひ今朝の冬
初霜に薄き化粧や芝の庭
永田 石山